

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） _____ 風間 伸次郎



学位申請者 吉岡 乾

論 文 名 A Reference Grammar of Eastern Burushaski

結論

吉岡乾氏から提出された学位請求論文“A Reference Grammar of Eastern Burushaski”について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は風間を主査に、副査として学外からインドの諸言語や言語類型論に詳しい国立国語研究所教授プラシャント・パルデシ氏、同じくインドの諸言語と歴史言語学が専門の東京大学准教授小林正人氏をお招きし、学内からさらにアジア・アフリカ言語文化研究所の中山俊秀教授、同じく同研究所の渡辺己准教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は東ブルシャスキー語の全体像を明らかにした現在のところ日本で唯一の記述文法である。本論文のデータは、多くの困難と危険の伴うパキスタンでの六度に亘る現地調査によって得られたものである。本論文は音韻・文法の記述と四つのテキストおよび約3,000項目の語彙集から構成されている。記述の後半である第II部では理論的問題が扱われており、この言語の示す他動性や定性などの問題についてオリジナルな研究結果が示されている。なおブルシャスキー語の系統はいまだに不明であり、言語類型論に資するデータとしてもこの言語の記述は重要な意味を持っている。

本論文の構成は以下のようになっている。

第I部の第1章では、この言語の音韻体系を記述している。東ブルシャスキー語は36の子音と10の母音を持ち、音節構造はCCVCCを基本としており、さらに弁別的なピッチアクセント体系を持っている。ブルシャスキー語全体における形態音韻論的ルールもこの章で記述している。

第2章では品詞分類を示し、この言語における8つの品詞を定義している。すなわち、名詞・代名詞・形容詞・数詞・動詞・コピュラ・接続詞・間投詞である。この言語には5つの名詞クラスが存在し、全ての名詞が必ずそのいずれかのクラスに属することについても記している。

第3章は名詞の形態論である。ブルシャスキー語の名詞は数や格で、さらには人称によっても曲用する。名詞に用いる複数接尾辞には何十もの形式があり、いずれの接尾辞が用

いられるかは語基ごとに決まっている。その組み合わせには厳密なルールがない。他方、複数接尾辞を二つ組み合わせてなされる二重複数表現に生ずる二つ目の複数接尾辞は、上記の多くの接尾辞の中のごく一部であるということを示した。ブルシャスキー語の格標示は格接尾辞によるが、その形式は十種類を上回る。中でも場所を示す格に関しては、4つの位置格と3つの方向格との組み合わせにより実現する。いずれの先行研究もゼロ形態素を立てていないが、本稿では十分な根拠のもとに絶対格接尾辞の-Øを立て、格体系全体の記述を行っている。

第4章は指示詞・人称代名詞・疑問詞、第5章は形容詞・数詞に関する記述である。

第6章は動詞類に関する記述である。ブルシャスキー語の動詞語根は、接辞による五つの派生プロセス（完結・人称・使役・複数・アスペクト）の複雑な組み合わせによって語幹を形成する。これらの派生プロセスは語根ごとにその選択肢が決まっており、その組み合わせは固定的である。なかでも使役接頭辞は、一部の一項動詞語根から他動詞が派生される時にしか用いられない。動詞は主語参加者の人称・数・クラス、極性、ムードを示し、さらに一部の動詞は受動の参加者（*undergoer*）の人称・数・クラスとの一致も行う。ブルシャスキー語には五つのムードがある、すなわち直説法現在・直説法非現在・命令法・希求法・条件法の五つである。「現在／非現在」という枠組みは本論文で初めて提示されたもので、先行研究には見られない概念を指している。非現在接辞 *-m* は時間性表現では過去・未来を指すために用いられ、条件表現にも用いられる。一方現在接辞 *-Ø* は、話者がその事態を現在時に存在しているものとして捉えている状況、すなわち現在・将然などの叙述において用いられる。

第7章では、接辞付加によらない四つの語形成法を記述している。この言語では、複合操作や単純反響操作はほとんど用いられない。これに対して、反響形成（*echo formation*）、或いは固定分節重複（*fixed segment reduplication*）と呼ばれる操作は日常会話で頻繁に用いられる。反響形成とは、語形の一部を変形させて重複させる操作のことであり、ブルシャスキー語ではその置換用の分節として、第一に */m/* が、そして第二には */s/* が好んで用いられる。反響形成は個人差の大きい語形成である、ということを考慮し、話者によって許容範囲や反響形式に差が出ることも調査し、実例によってその状況を示している。擬音語や擬態語もしばしば用いられるが、話者はその使用の際に母音交替や重複を巧みに用いており、これによって異なった音や様態の印象の描写がなされることを示した。

第8章の統語論では、節内での基本的な構成要素の順序を説明し、さらに文法関係と一致体系に関して論じている。ブルシャスキー語の動詞は、中核項（*core arguments*）の格を能格型で支配する一方、人称接尾辞においては、絶対格項ではなく主語項の人称・数・クラスとの一致を示す。他方、人称接頭辞は受動者役割の項との一致を見せる。ブルシャスキー語には多様な副動詞的形式があり、さまざまな機能で節を連結する。先行研究での記述とは異なり、もっぱら同一主語の節連結にのみ用いられていたこれらの副動詞的形式が、最近では自由主語連結に変わって来ていることを明らかにした。

第II部では三つの理論的な問題を扱っている。まず第9章では、人称接頭辞を取る自動詞と取らない自動詞との対、同じく人称接頭辞に関する他動詞の対の機能差を中心に考察

した。特に、なぜそのような他動詞の対があるのかということに関して、諸先行研究が十分な検証を行っていないことに注目した。本章の考察では、他動詞において人称接頭辞が付加されるか否かは目的語の「目的語らしさ」に依存していることを明らかにした。その「目的語らしさ」については、その目的語名詞が持っている名詞クラスや定性の観点から確定することに成功した。

第10章では、*d-*接頭辞による動詞派生について論じた。この接頭辞の機能に関しては研究者間で意見が分かれている。本章の考察では、この接頭辞が示す様々な意味・機能を、五つの機能（接近移動・状態変化・静的状態・結果状態・逆使役表現）に集約することを提案し、さらにその諸機能の間には文法化の方向性による説明が適用できることを示した。これら全ての機能には動作の終着点が含まれていると考えられるため、これらが完結的（telic）な特性を共有していることを示した。

第11章「定性と特定性」では、まず不定接辞である *-an* と *-ik* に関してテキストデータを用いて調査し、それぞれの名詞が持つ特性の間に見られる形態統語的ならびに語用論的關係を考察した。その結果、話者は発話内での指示対象の定性および特定性に基づいて文法役割を選んでいることが明らかになった。

審査の概要及び評価

上記のように氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、東ブルジャスキー語の全体像を示したことにまず大きな価値がある。これまでの中心的な先行研究はドイツ語もしくはフランス語で書かれているので、英語による記述である点でも、他の研究者からのアクセスを容易にしたという価値がある。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。上記の点以外で、各委員より特に高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・言語類型論的な観点からみて興味深いこの言語の特性について、理論的な研究をよく踏まえた上での研究、記述を行っている。
- ・ドイツ語、フランス語、ロシア語で書かれた諸先行研究をていねいによく検討している。
- ・形態論的な取り扱いやグロスのつけ方など、言語学的な分析ならびに整理が精密になされている。
- ・内容的にも興味深いテキストが付されており、それ自体が資料的にも高い価値を有している。
- ・形態的な諸変化形について、語彙を一つずつていねいに調べている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・重要な個所において、説明の後に単純な構成の文例をより多く提示して欲しかった。

- ・現地調査で行った作業等について、もっと具体的に多くを記すべきである。
- ・一通りの説明にはなっているが、十分な証明とはなっていない箇所がある。品詞の定義および設定などの問題に関して、循環論に陥らないよう注意する必要がある。
- ・この言語が、類型論からみた傾向に合わないような特性を示している点に関しては、その問題をさらに追及し、この言語が示す独自性についてさらに論じて欲しかった。
- ・インド的特徴とそうでないものなど、地域的特徴の観点からこの言語の位置づけを検討すると良かったのではないか。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。ブルシヤスキー語文法全般の記述研究の進展、さらには近隣の危機言語の記述研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者吉岡乾氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。